

敦賀における昆布加工業の歴史

海道 静 香

一、はじめに

敦賀の水産加工物の名産にかまぼこがあるが、昆布加工業も盛んであり、昆布を形どつた菓子類も製造されている。市場も広範であり、地場産業ということもできる。寒海の産物である昆布が何故敦賀の地で加工されるに至つたのか。本稿ではその歴史に触れてみた。

二、昆布及び昆布加工業

昆布は日本では北海道・青森・岩手が主産地である。古代の昆布関係の記事をみると、『延喜式』卷二十三民部の交易雑物に「陸奥国（中略）昆布六百斤、索昆布細昆布一千斤（中略）右以正税交易進、其運功食並用正税」、卷三十九内膳の年料にも「陸奥国索昆布廿二斤、細昆布百廿斤、広昆布卅斤（後略）」とあり、陸奥国が昆布生産国となっている。

その後一五世紀の松前への進出により、江戸時代以降は松前産昆布が主流を占める。江戸中期の『本朝食鑑』三「水菜」（元禄年間）には「自松前伝送于越前敦賀、自敦賀伝送于若州、若州小浜市人製之号若狭昆布、自若狭伝送于京師、京師市人製之号京昆布（後略）」とあり、松前産昆布が敦賀・小浜を経て京に送られ、小浜・京では既に何らかの形でその加工が行われていた。⁽¹⁾加工業は江戸中期以後、細工昆布と刻昆布の二つに分化する。前者は上質の原料を用い

酢に浸し乾燥させた後、鉋刀で削剝し、臙昆布やとろろ昆布を製造するものである。後者は原料をそのままあるいは緑色染をほどこし乾燥させて細く刻んだものである。細工昆布は主として国内向であり、刻昆布は用途が広いため中国にも輸出された。両者とも用いる道具は鉋刀・鉋⁽²⁾であり、簡単な家内手工業である。

三、昆布加工業成立の背景

北海道の昆布が加工されるには、松前貿易が行われることが必要であるが、敦賀では一五世紀後半応仁・文明の乱の頃既に昆布をはじめ、鮓・鮓・鱈などが松前より移入されていた。⁽³⁾元亀年間（一五七〇―一七二二）のものと思われる朝倉義景の書状⁽⁴⁾には、

就在陣之儀、蒲穂子^并昆布一折祝着之至候、委細幸乗坊可申候、
上々謹言

十月廿二日

義景（黒印）

平松幸熊殿
とあり、敦賀に陣を置いた折に氣比神宮の神官より、かまぼこ・昆布を贈られたことがわかる。既に両品が敦賀で流通していたのではないだろうか。下つて慶長年間（一五九六―一六一四）の初め頃は次のような文書⁽⁵⁾がある。

松前慶広書状

尚々任見来昆布拾駄、御音信計ニ候。

船御下候ニ付而、大鉄炮送給候。萬々畏入候。其以来不懸御目、御床布存候。今度大風吹候而、船共破損候へ共、貴所之船無何事候儀、可為御大慶候。此節何にても不及馳走、失本意候。何様不

斗以面可申承候。恐々謹言。

八月十九日

松前志摩守

慶広(花押)

越後屋兵太郎殿

参御報

松前藩主から敦賀の船問屋越後屋に宛てたものであり、両者の取引が多かったことを示唆する。

敦賀港の発展には近江商人が強く関係しており、松前貿易においても文祿年間(一五九二―九五)に八幡の岡田弥右衛門が松前城下に店舗を構え、慶安年間(一六四八―五一)には西川伝右衛門、田附新助、建部七郎右衛門等が松前に渡航し、場所請負人となった。

彼ら近江商人の荷を「荷所荷」といい、特に松前藩より便宜と特権を与えられていた。敦賀の船問屋も彼らの荷を扱い「敦賀参会」と称す松前行の打合せて近江商人と問屋・船頭らが上り荷・下り荷を決定していた。⁽⁶⁾かくして寛文年間(一六六一―七二)には、松前物の移入が昆布を筆頭に干蛙・串貝・塩引・いりこなど十三種、その金額は年に千五百両に上った。⁽⁷⁾近江へは七里半越を利用したわけであるが、道ノ口を通る荷に課される駄別札の配布品に昆布があげられ、⁽⁸⁾荷の分類で大荷物に刻昆布、中荷物に昆布の名がみえる。昆布は明和八(一七七七)年に大荷物に変更されている。⁽⁹⁾よって昆布の加工が当時既に行われていたといえる。

天和年間(一六八一―八三)の敦賀の様子を記した『遠目鏡』⁽¹⁰⁾によれば、松前藩船の船宿二戸、松前物問屋三戸、江指宿二戸、昆布屋三戸が敦賀に存在していた。この昆布屋がいかなる性格のもの

であるかは判然としないが、松前貿易の進展とともに昆布加工業の萌芽がみられることは確かである。

四、江戸時代の昆布加工業

昆布加工業が始まった年代をみると、刻昆布は大阪で享保六(一七二一)年頃、江戸では文政年間(一八一八―二九)以後のことである。敦賀は江戸より早く宝暦年間(一七五一―六三)に始められ、寛政三(一七九一)年に伊藤平右衛門が長崎より本格的な製法を伝習して来るに及んで盛んになった。⁽¹¹⁾細工昆布も敦賀では宝暦年間に高木善兵衛によって創始され、水口弥五郎、丸屋六兵衛、碗屋茂兵衛等が続いた。⁽¹²⁾

寛政十一(一七九九)年に東蝦夷地が幕府直轄領となり、江戸に「蝦夷地御用会所」を設けた。この会所の箱館御用掛に松前藩の村上伝兵衛がなり、彼の推挙により以前から松前問屋として交流の深かった敦賀の船屋治左衛門と網屋伝兵衛の両名が御用商人として出入りを許され、⁽¹³⁾敦賀と松前のパイプは切れなかった。

下って文政七(一八二四)年には、細工昆布が小浜藩主に献上され、同年細工昆布仲間の設立が許可され、さらに福井をはじめとする越前各城下における御役御口銭(仲間手数銀)免除の特権を得ている。販路も加賀・越中・美濃・尾張・伊勢・近江・山城・若狭の諸国に広がり、江戸にも支店を置いた。弘化二(一八四五)年には細工昆布仲間より將軍家への昆布献上を出願して許可され、三代目高木善兵衛が献上品の製造にあたった。⁽¹⁴⁾細工昆布が活況を呈すに従い、仲間以外の製造者も増え、天保二(一八三一)年には、次のような嘆願書⁽¹⁵⁾が出されている。少し長いが引用する。

乍恐口上書ヲ以奉願上候

一御免御用細工昆布屋仲間之儀ハ、去ル文政七甲（貼紙）八月從、御上
様細工昆布御用□ 仰付難有、早速奉調達候所、追々御用□

誠ニ冥加身（貼紙）ニ余リ難有仕合（貼紙）ニ奉恐入候、
様江願書ヲ以細工昆布屋□ 儀願出候処、御聞濟被為有、
同九月四日ニ奉蒙御免許、同十月五日ニ屋根看板御免被為下置

候、尚此上諸国江広ク売捌敦賀産物ニ可相成様被為 仰付候、
夫5仲間一統相勵、広ク売捌渡世仕候折から、所々ニ昆布細工

仕候者有之ニ付、差留候得共聞入不申ニ付、無換、御上様江御
苦勞ヲ奉備恐入候、文政十三庚寅三月廿九日ニ町内一統御触流
被下置難有仕合ニ奉存候、其後も所々ニ細工昆布□ 候者も

有之候得共、吟味仕差留申候所、此節一向猥□ニ相成所々ニ細
工昆布内職ニ手広ク仕候故、度々差留申処、井川之浪人千田半

左衛門と申仁、是非共内職細工昆布仕差留聞入不申故、外々
ニも細工昆布内職仕、仲間之差支ニ相成、甚以困り入申候、然

ハ先達而從御上様之厚キ御慈悲ニテ細工昆布屋仲間御免許被為
仰付被下置候規矩相立不申、打捨置候而ハ、御上様江奉恐入

候事缺ケハ敷奉存候、何卒御憐愍之御慈悲ヲ以町中一統細工昆
布職仲間之外不成之趣□ 出被下置候ハ、難有仕合ニ可
奉存候、

右之趣被為聞召分、御憐愍之御慈悲ヲ以、願之通被為、仰付被下
置候ハ、難有仕合ニ可奉存候、

天保二乙（辛卯）年

丸屋六兵衛（印）
水口弥五郎（印）

米屋善兵衛（印）
梶屋太兵衛（印）
目薬屋治郎兵衛（印）

御奉行所様

この中に細工昆布仲間設立のこともみえている。差出人五人のうち
三人は前述した三人の後継者であろう。

松前からの昆布の移入も続いており、次のような証文（16）が残って
いる。敦賀の豪商高嶋屋に宛てた箱館商人のものである。

売付約定証文之事

一ホロイツミ新昆布四百三拾五石目

但し場所御口銭買人持

同口銭は売人持也

右之昆布代金不残唯今儲ニ請取申候処実正ニ御座候、然上は来戊
年夏昆布於御場所表ニ積渡候上、（後略）

天保八年

西八月

高嶋屋吉五郎殿

林七郎兵衛（印）
○印文 箱館大町大木辰巳屋

この証文から昆布は夏に北海道より出荷されたことがわかる。それ
を秋から冬の間に加工して、需要期である暮から正月に出荷するの
であるが、敦賀は日本海側であるために、冬の農閑期の余剰労働力
が昆布加工にあてられたものと思われる。（17）

一八世紀になると、西廻航路の開発により敦賀港の主要物資であ
る米・大豆の取扱量は激減するが、（18）松前貿易の方は東西蝦夷地が
再び直轄領となった安政二（一八五五）年に産物取引のため「産物

会所」が箱館・江戸・大阪・兵庫に設けられるが、次いで文久二（一八六二）年に敦賀・堺に置かれたことをみると、かなりの取引があったものと推定される。

五、明治以後の昆布加工业

維新後も松前貿易に大きな変化はなく、明治元（一八六七）年に「産物会所」に代わって「函館御用所」「産物会社」が東京に、兵庫・堺・敦賀等には「北海道産物会所」が設けられた。しかし、同五（一八七二）年には東京・大阪・兵庫・敦賀の会所が閉鎖される。理由は、抜荷脱税取締のためと、取引額の一割を収めなければならぬ商人の反対によるものである。

敦賀もこれによって打撃を受けたのか、詳細はわからないが、昆布加工业は停滞期を迎える。明治三十三（一九〇〇）年には「敦賀町民昆布業組合」が設立されるが、名ばかりで組合員数もはつきりしない。明治末期には現在最大手の高橋商店が京都より進出してくるが、この頃には昆布加工业者三十数軒、青昆布問屋十三軒程が存在したらしい。この時期の加工昆布の移出額は

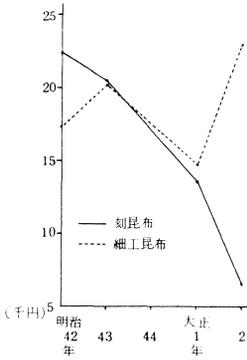


図1 敦賀の昆布移出額は不詳「敦賀郡誌」より

図1のように刻昆布が減少し細工昆布が増加している。両者の合計を工産品製造額と比較すると六%から十一%にあたり、かなり重要な産業であったことがわかる。また、敦

表1 敦賀町移出入貨物 (明治41年)

移出貨物	刻昆布	250t
生産地	敦賀町	
消費地	名古屋・一宮・岐阜・大垣・米原・彦根・八幡・草津・大津・京都・大阪・長浜・木ノ本・今庄・武生	
移入及經由貨物	昆布	2,100t
生産地	後志・石狩・天塩沿岸各地	
集散地	小樽	
消費地	京都・大阪・大津・大垣・神戸・長崎・彦根・八幡・名古屋 岐阜	

「敦賀郡誌」より

表2 明治40年 敦賀町移出入 (昆布)

移入	陸運	3,549円	仕出元	京都・美濃・近江
	廻漕	317,349円	〃	北海道・伏木・青森
移出	陸運	284,484円	仕向先	京阪・美濃・尾張・神戸
	廻漕	7,759円	〃	鳥取・北海道・下関

「若越小誌」より

表3 原料昆布消費状況 (昭和11年)

大	阪	42,700石	22.9%
神	戸	19,500	10.4
広	島	13,000	7.0
名	古	11,400	6.1
東	京	10,550	5.6
敦	賀	9,000	4.8
舞	鶴	8,200	4.4
京	都	8,000	4.3

「日本昆布大観」より

賀における貨物取扱状況は表1・表2のごとくなり、移入された昆布の九割が移出される昆布輸送の中継点であることがわかる。刻昆布の出荷地をみると、江戸時代後期と大きな変化はない。昭和七（一九三二）年には「敦賀昆布商業組合」が設立され、同十五年には組合員数六二で全国六三三の一割が集中するほどになった。これを反映して同十一年の原料昆布消費量は都市別で第六位、十八年の生産量は福井県が第五位となっている。

表4 昆布加工工業（明治18年）

府県名	生産高	工場数	職工数
北海道	6,708貫	298	3,941人
大阪府	3,357	451	2,444
東京都	2,927	164	1,777
京都府	2,678	136	1,189
兵庫県	2,482	86	603
兵庫県	1,295	211	1,111
愛知県	1,142	46	703
富山県	1,038	109	477
全国	29,623	2,305	19,036

〔日本昆布大観〕より

布」の生産も全国の八割を占めるといふ。⁽²⁾

六、おわりに

敦賀に昆布加工工業の成立した条件をまとめると、次のようなことになろう。

- 一、昆布が製品化されると重量が二十%程に減少するため中継地での加工化が進んだ。
- 二、大消費地たる京・大阪との間に近江商人が介在し、松前貿易を進展させた。
- 三、加工期である秋・冬に余剰労働力が豊富であった。
- 四、廻漕されるときは、原草を乾燥させ畳んで束にしたものであり、陸送するとき、荷造りし直したものである。

以上敦賀の昆布加工工業の歴史を年代を追ってみてきたが、敦賀港

現在の敦賀の状況については、調査が十分でなく、また別の機会に報告したい。ただ敦賀の最大の特色は「手かき昆布」の生産にあり、手かき職人は全国五〇〇人足らずのうち敦賀に三〇〇人程が集中している。職人の平均年齢も三十二才程で、五〇人前後が存在する大阪の五十七才程と比べ非常に若い。「手かき昆

の盛衰との関係、現代へのつながりの点等の解明が今後の課題として残される。
(福井県立敦賀高校)

注

- (1) 類似の記事は『雍州府志』（貞享年間）『大和本草』（宝永年間）『和漢三才図絵』（正徳年間）『日本山海名産図絵』（寛政年間）にもみえる。
- (2) 鉋刀は昆布を削る包丁、鋸はかんである。
- (3) 天野久一郎『敦賀経済発達史』一九四三、六二頁
- (4) 敦賀市『敦賀市史』史料編第二巻 一九七八、四四一頁
- (5) 牧野信之助選輯『越前若狭古文書選』一九三三、五三五頁
- (6) 前掲(3) 一六五、一六六頁
- (7) 羽原又吉『支那輸出日本昆布業資本主義史』有斐閣、一九四〇、三四頁
- (8) 前掲(4) 史料編第一巻 一九七七、五〇頁
- (9) 敦賀郡『敦賀郡誌』一九一五、四二三頁
- (10) 前掲(4) 史料編第五巻 一九七九、六二三、六五六頁
- (11) 稲垣美三雄編『日本昆布大観』一九四七、第五編一二一～一八頁。
- (12) 前掲(9) 五六六頁
- (13) 前掲(9) 四七九頁
- (14) 前掲(9) 五六六～五六七頁
- (15) 前掲(4) 史料編第二巻 二九五頁
- (16) 前掲(4) 史料編第一巻 二八九頁

- (17) 聞き取りによると、十月から三、四月までが加工の多忙な時期で、現在もこの時期には専門の昆布職人の他に農家の人も加工に従事するため、職人の数は一倍半に増える。
- (18) 前掲(3)によると、寛文四(一六六四)年の七六六千俵が寛政七(一七九五)年の三八千俵に減少する。
- (19) 前掲(11) 第六編 七五頁、前掲(9) 七六五頁では刻昆布六戸、細工昆布二十四戸とある。
- (20) 昭和五十三年九月の高橋商店での聞き取りによる。